集談会記事

第７回東海北陸重症心身障害ネットワーク研究会 プログラム・抄録

平成31年３月１日（金）
国立病院機構医王病院　中病棟３階　地域医療研修室

抄録

一般演題１

座長　医王病院　第１小児科医長　丸箸圭子
療育指導室長　池島　守

１．重症心身児（者）の外出・外泊を妨げる要因の探究

小谷愛美，合田　瞬，須藤鈴佳，
一色莉緒
鈴鹿病院　西２階病棟

【目的】重心病棟入院患者家族に，外出泊の減少要因調査
【対象】入院患者家族
【方法】質問紙調査
【結果】１．１）年齢：40～50代12.5％・50～60代40％・それ以上47.5％　２）キーパーソン：父母77.5％・きょうだい15％・後見人５％・無回答2.5％　２．SPSS集計：患者との続柄と面会回数，キーパーソンの年齢と面会回数，患者の状態と外泊の有無で有意差はない．医療処置・技術が必要な患者は外泊していない．３．外出泊不安点は，無介護者，急変心配，非バリアフリー，介護不安，遠方，多忙，知識不足，高齢，家族介護など
【結論】１．外出泊とキーパーソンの年齢や続柄は関係がない　２．医療的処置・技術が必要な患者は外出泊できていない　３．家族の不安は身体的・精神的・環境的要因による

２．長期入院している重症心身障害者をもつ高齢化する母親の思い

浅井とも江，神崎景子，筒井利奈，
山田実穂，柴田千歳
豊橋医療センター

【目的】長期入院している重症心身障害者をもつ高齢化する母親の思いを明らかにする
【対象】Ａ病院に長期入院している重症心身障害者を子供に持つ65歳以上の母親５名
【方法】対象に半構造化面接をし，内容をコード化したものを二段階に抽象化.
【結果】32のサブカテゴリーと15のカテゴリーが抽出された.
【結論】〈自分と子供の加齢による体力低下に対する戸惑い〉〈今後の関わりに対する不安〉〈子供が生きがいである〉〈外泊時の世話が負担に感じる〉〈子供のために今できる事をしたい〉等，15のカテゴリーが抽出され，高齢になった母親の思いを理解し，「子供のために今できる事をしたい」という思いを支える看護が重要だと示唆された.

３．介護力に不安を持つ母親への退院支援 ～二人目の重症心身障害児在宅介護に向けて～

浅野侑子
天竜病院　２病棟

【目的】家庭環境に不安を抱えながらも重症児の在宅退院を希望する母の想いに寄り添い，今回初めて退院支援について取り組み始めたため，経過と今後の取り組みを報告する.
【症例】対象児は医療処置が必要な重症児．母親は既に在宅介護をしている重症児を抱えていた．退院への希望や不安は口に出すが，解決しようとする姿勢はほとんど見られない．母子家庭・生活保護等，家庭環境に不安を抱えているため，医療者は疑問を抱いていた．看護者側では重症児の退院調整の体制が確立されていない問題があった.
【方法】現在の取り組みとして，初めて父母のみで２時間の外出を行った.
【結論】今後の取り組みとして，２度目の外出を計画，知識・技術，緊急時の対応の指導，外泊について多職種を含め複数人で判断して順を追って進める.

４．当院の短期入所における課題の整理

畑原　圭
石川病院　療育指導科

【目的】当院の短期入所に寄せられた意見の整理と課題の整理
【現状】アカシア病棟で短期入所を300日以上受けている．指導員が短期入所利用家族から様々な意見を頂いた.
・土日を石川病院しかやっていないのに利用できない
・緊急で受けて欲しいときに受けてくれない　等
【対応】重症心障害児者病棟運営委員会にて上記を報告し，対策を検討する．指導員は相談支援専門員を頼り，面談やモニタリング会議に出掛けていくようになった．そこで家族の現状，思いを知ることができた.

【結果】家族の意向を伝え病棟で検討．病棟の中では「利用者重症化」「安全に受け入れられるか不安」の意見も挙がった．
【結論】・病棟で利用家族の意向と職員の思いをうけ安全に短期入所できるよう検討を続けていく．
・地域出た事で当院に寄せられるニーズと，相互理解が深まったと考える．

5．病院機能移転後の静岡医療センターの短期入所の現状

土屋早紀，桑原啓吏，溝口功一
静岡医療センター　療育指導科

【はじめに】当院は静岡富士病院と機能統合し，新しい地で短期入所を開始した．短期入所開始に至るまでの経過と，１年が経過した現状を報告する．
【経過】開始にあたり，関係スタッフと検討会を開催．元静岡富士病院短期入所利用者や関係機関に案内を実施．
【現状】現在は静岡富士病院利用者より新規利用者の方が多い．また，歩行可能かつ医療度が高い児童や人工呼吸器装着者の受入を開始した．
【まとめ】短期入所を開始して１年経過し，現在も新規利用者は増加している．歩行可能かつ医療度が高い児童や人工呼吸器装着者を受入れ始めたが，リスクが高いため，受入の調整も必要となる．また，プレイルームでの入所者との生活や療育活動への参加の希望も多く，今後の課題としたい．

6．重症心身障害患者への外来栄養指導の継続を試みて

竹中りえ，永田まり子，宮原裕子，
石原詠子
長良医療センター　栄養管理室

【目的】当院では重症心身障害患者の外来栄養指導が年に数件行われている．今回継続指導を行い状態が安定したため，その症例を報告する．
【症例】18歳，女性，脳性麻痺，てんかん（発作群発），身長150㎝，体重37kg（－５kg/４カ月），BMI16.4，ALB4.1g/dl，ADL寝たきり，経口摂取可能．指導１カ月前より摂取量減少．適正栄養量，適正体重の指導となった．
【結果・考察】初回指導後てんかん発作減少，食事摂取量漸増したが体重減少あり．栄養補助食品提案を行い，３回目指導時体重維持となった．必要エネルギー量・標準体重算出で目標が明確化され，保護者の不安解消につながった．８カ月後の栄養指導では標準体重内であった．今後も体重の変化や栄養状態に注意し継続指導を行っていきたい．

7．重症心身障害者の期待反応の芽生えに着目した個別療育の実践

櫻井若菜，鈴木みえ，村松順子，
松田裕美子，蒔田千里，山内慎吾，
酒井素子，南山　誠，久留　聡
鈴鹿病院　脳神経内科部療育指導科

【目的】期待反応が表出できる療育活動の幅を広げる．
【症例】20歳代女性，大島分類１，アテトーゼタイプの脳性麻痺．
【方法】くすぐり遊びとモノ（人形・絵本）を用いた個別活動を実施し，療育記録から期待反応・応答反応に関する記述を抽出・分析する．
【結果】くすぐり遊びでは，くすぐる前に高い確率で笑顔が生起した．モノを用いた遊びでは，モノ提示時は笑顔が見られるが，モノ提示前の期待反応はくすぐり遊びほどでなく，継続した関わりが必要と考えられた．
【結論】期待反応の表出に着目して療育活動を実践することで，新しい遊びを導入することができ，本人が楽しめる活動のレパートリーを増やすことができた．

一般演題２

座長　医王病院　第２小児科医長　脇坂晃子
教育担当師長　八反美子

8．身体拘束の解除を通して

山本美保，諏訪富士子，細川明美，
柿島ゆかり
七尾病院　１階病棟

【目的】身体拘束廃止未実施減算が新設され，それに伴い病棟全体で患者の身体拘束が解除でき，拘束時間が短縮できないか検討した．
【症例】身体拘束が実施されている患者について多職種間でカンファレンスを実施．ベッドの変更や車椅子安全ベルト解除など身体拘束が解除できそうな患者の看護計画を立案・実施し，拘束解除後の転倒･転落予防を多職種間で情報共有をした．
【結果】４月身体拘束は91％だったが２月76.9％まで減少した．ベッド４点柵から３点柵に変更が５件，車椅子安全ベルトの解除が５件であった．身体拘束時間の短縮実施率は35.4％から52.1％に増加した．
【結論】身体拘束を解除するには多職種間での連携が必要である．拘束解除後の患者の安全を守るため，事故防止や環境調整の提供をする．

9．他害行為減少への取り組み
～スタッフ教育を試みて～

加藤麻紀，嘉数江美子，川村陽子，
浦野朱美
北陸病院　西１階病棟

【目的】他害行為の要因に対してSHELL分析を行い，スタッフ教育を通して他害行為が減少する
【対象】病棟スタッフ40名
【方法】平成27年～29年５月の労災件数８件中，他害行為５件に対してSHELL分析を行う．他害行為の要因に対しスタッフ教育を行う．
【結果】SHELL分析より患者理解不足，スタッフ個々で対応が違っている等の要因が抽出された．統一した患者対応を実践するためマニュアル作成やカンファレンスでの患者理解に努めた．また，ワイヤレスコールを工夫したパニックアラームの使用，CVPPP技法を活用した移送方法の反復練習を行った結果，他害行為は減少し労災件数も０件となった．
【結論】患者理解を深め，統一した関わりを実践することで

他害行為が減少した.

10. 新人看護師への救急対応シミュレーション学習会の取り組み

松谷梨央，稲垣磨奈美，東岡　史，
杉浦勝美
三重病院　５病棟

【目的】救急対応に新人看護師が行動できるように教育することを目的に取り組んだ.
【対象】新人看護師２名
【方法】新人看護師に予告なく夜間帯の急変事例を元にシミュレーションをしてもらい，その後デブリーフィングを実施. 学習会を開催し，自分たちが実施した最初のシミュレーションと，見本になるシミュレーションを見比べ，学習会参加者全員でデブリーフィングを行った．学習会から１カ月後に同様のシミュレーションを実施し，デブリーフィングを実施.
【結果】学習会でのデブリーフィングの効果もあり最初に比べるとアルゴリズムに沿った迅速な行動がとれた.
【結論】動画に撮りシミュレーションした本人が再度行動を見直すことで，不十分な部分に明確に気づくことが出来た.
　他のスタッフがシミュレーションAを見ることで，１年目に対しどういうところを指導したら良いか考えるいい機会になった.

11. 重症心身障害児（者）病棟でみられたグアーガム分解物含有濃厚流動食によるカード形成

金兼千春
富山病院　小児科

【目的】当院重心病棟において経管栄養法の統一をはかることを試み，濃厚流動食としてグアーガム分解物含有濃厚流動食アイソカルサポート®を選択した．開始約１カ月を経過した時点で，胃内排出遅延のある患者において，内視鏡検査で，胃内に異常な大きさのカード形成を認めた.
【対象】重心病棟に入院中で，アイソカルサポート®を用いた経管栄養を開始しており，胃内排出遅延や胃酸性度低下のある患者
【方法】９名に対し胃内視鏡検査，２名に対し胃造影検査を実施
【結果】内視鏡検査を実施した９名中８名，造影検査を実施した２名に，異常な大きさのカード形成を認めた.
【結論】粘度の高い濃厚流動食を，胃内排出遅延や胃酸性度低下のある患者に用いる場合，胃内に異常なカード形成の危険がある.

12. カルバペネム耐性腸内細菌科細菌保菌者患者に対する集学的ケア

坂口結花[1]，藤澤直美[1]，竹内与恵[1]，
本多雅之[1]，小松輝也[2]，安江亜由美[2]，
梅村実希[2]，早川恭江[2]，鱸稔　隆[2]，
加藤達雄[2]，舩戸道徳[3]
長良医療センターA３病棟[1]
同感染管理部門[2]
同小児科[3]

【目的】カルバペネム耐性腸内細菌科細菌（以下CRE）は標準予防策とともに接触感染予防策の徹底など院内伝播の予防策強化に努めるとともに，早期治療介入が必要である．今回，抗菌剤を使用することなくCREが陰性化した症例を報告する.
【症例】女児９歳　びまん性軸索損傷，低酸素脳症，外傷性血気胸，脾臓損傷
【方法】症例検討
【結果】ICTと連携し，個室管理とし物品や洗濯の個別化，袖つきエプロン，手袋ゴーグルマスクの装着の義務付け，病室内にグレーゾーンの設置．腹臥位とスマートベストにて排痰ケア，必要時理学療法士による排痰ケアの施行．また，腸内細菌の改善のため整腸剤の処方．７月に呼吸器系の感染を認めたが，ICTの介入にて問題が解決．厳格感染管理や抗菌剤を使用せず感染管理を行い，CREの陰性化に成功.
【結論】基本的な排痰ケアにて肺炎が軽快．手指衛生に対する動機付け. 成功体験が感染管理に対する意欲に結びついた.

13. 重症心身障害者に対する振動刺激の効果について

久野華子[1]，大西　靖[1]，豊島義哉[1]，
武藤亜紀子[2]
東名古屋病院　リハビリテーション部[1]
同小児科[2]

【目的】重症心身障害者の過剰な筋緊張亢進は，しばしば姿勢や日常生活等に支障をきたす．今回当院では重症心身障害者へ振動刺激を与え，筋緊張の抑制効果を検証した.
【対象】症例A及びB（いずれも20才代，CP，大島分類１）
【方法】排痰補助装置コンフォートカフ２（カフベンテック社）のパーカッサーモードを用い振動刺激を与えた. 評価は脈拍，血圧，SPO_2，他動関節可動域，Modified Ashworth Scale（MAS），Modified Tardieu Scale（MTS）とした．10日間，毎回実施前後で評価を行った.
【結果】関節可動域とSPO_2は,10日間平均で症例A・Bとも改善した．MASとMTSは実施後ほぼ同等値で，心拍数及び血圧に一定の傾向はなかった.
【結論】振動刺激を与えることで，痙性が影響していると思われる関節可動域の拡大が図れた．姿勢調整に寄与できないか，今後も関わっていきたい.

14. ドレナージの工夫によって肺炎が改善された水頭症の一症例

桐崎弘樹[1]，東　優美[2]
医王病院リハビリテーション科[1]
同看護科[2]

【目的】重症背側肺炎の治療
【症例】水頭症（VPシャントの適応外）で人工呼吸器装着し，日ごろから体調管理が難しく，体温調節や体位ドレナージなどを行っていたが重症肺炎を併発してしまった症例
【方法】通常行っているドレナージ体位での排痰が困難でありドレナージの方法に工夫が必要であり，今回新たなデバイスを用いての体位の工夫を行った.
【結果】頭部の保護や骨折，変形・拘縮などの様々な問題を加味し，新たなデバイスを創作し作成したことで危険性が少なく従来よりも効果的なドレナージ体位を工夫することで肺炎が改善された.